

# 西郷隆盛と経済問題

—近代日本の経済的発展とどう関わったか—

大阪経済大学 客員教授

家近 良樹



今年の八月と十一月に、西郷隆盛に関する二冊の著作をあい次いで出版した（参考文献参照）。前者は四百字詰の原稿用紙に換算して千二百枚に及ぶ文字通り大部の著作となった。だが、これでも西郷の生涯の全貌を十分に読者に伝えることが出来ず、それが後者の執筆に繋がった。後著は、ひたすら正確な評伝となることを目指した前著では取り上げること自体が難しかった問題を主たる対象に、比較的自由的な立場から西郷に関わる謎に迫ろうとしたものである。

そして、この二冊の刊行によって、六年前に出版した西郷に関わる拙著（ただし専門書）と合わせると、結局、三冊もの西郷本を世に出すことになった。最初から、どうしても書

きたいと手を挙げたわけではなかったが、図らずも、このような結果となった。来年のNHK大河ドラマの主人公が西郷隆盛に決定をみたこととの絡みで、なにやら西郷とは深い因縁を感じざるをえない。

## 一．西郷と経済の関係について

さて、本誌の編集部から私に与えられたテーマは、西郷が近代日本の経済的発展にどのように関わったのかという問題の解明である。一見なんでもないテーマのようだが、これが存外難しい。ひょっとすると、西郷隆盛研究にとっては、最大の難問と言えるかもしれない。

野中敬吾さんという、在野の西郷研究家がかつていた。この野中さんは、鹿児島県人ではなく愛媛県人であったが、物心つく頃から西郷の肖像画に魅せられ、その後、西郷に関する、ありとあらゆる種類の書物や論文、そ

### 〈目次〉

- 一．西郷と経済の関係について
- 二．島津斉彬の近代化事業と西郷
- 三．西郷の経済観の大きな特徴

れにエッセイの類を集め（解説を付し）、人生を終えた人である。

この野中さんの編になる文献目録（『西郷隆盛関係文献解題目録稿』）を眺めても、西郷と経済問題との関わりについて触れたもの（文献）はほとんどない。ちなみに記すと、西郷隆盛の評伝は、イエス・キリスト伝のそれに次ぐほど多いとされる。それにもかかわらず、である。いかに西郷が世間一般の認識では経済の人ではないと見られているかが、こうしたこと一つとっても判る。



▲西郷 隆盛

### ㊦ 経済が不得手だと見られた西郷

では、なぜ西郷は、このように見なされるに至ったのだろうか。これには、やはりなんといっても同時代人の評価が大きく関わっている。例えば、西郷との関係が悪かったことで知られる大隈重信などは、はるか後年の回想（『大隈重信は語る』）で、西郷のことを次のように評している。やや長くなるが重要なので関係する箇所を掲げることにした。

「西郷というのは文人でもなければ武人でもない。ただ人情に厚い涙もろいというだけの人であった。…大西郷や板垣（退助）は…政治の実際の問題の方はあまり得手でない。道路をひらくとか橋をかけるとか、港湾を築くとか、また金が足りぬ、これをどうしたらよいかとか、税をいかように取ったらよろしいかという行政の繁劇な事務になると、長所でないところから、かえってものうくなる。」

これでは、西郷は経済面はおろか、政治面

も不得意な、無能な政府要人ということになる。いや、それどころか肝心要<sup>かなめ</sup>の軍人としても評価されていない。そして、これは、「外交、財政、経済はもとより、明治維新以後の、内治外政の諸施設にほとんど侯（＝大隈）の関係しないところは無い」（『大隈侯昔日譚』序文）とされた大隈の西郷評価であっただけに、影響するところは頗る<sup>すこぶ</sup>大きかったと言わざるをえない。さらに、伊藤博文にも同様の西郷評価が見られる。伊藤も、大隈と同じく、西郷が政治家のレベルに達していなかったと評した（したがって、経済方面の能力など論外だったと見なした）。

こうした同時代人の西郷に対する評価が、経済を苦手とする西郷のイメージの形成に直結したことは間違いない。政治面においてすら能力の認められない西郷なら、ましてや経済面に関しては能力も関心もともになかった

に違いないと見なされてきたのである。

そして、これに輪をかけたのが、西郷が商人肌の人物（なかでも武士）をひどく嫌ったことであった。例えば、西南戦争勃発時に、鹿児島県令として西郷を支援し、そのことで後に斬首刑となった大山綱良に対して、西郷はある時ひどく罵った。それは、大山が金銭のことばかり言う「まったくの商人肌合い」の人間に成り下がっているとの批判であった（明治六年六月二十九日付叔父宛書簡中に見られる言葉）。

大山は、元来、西郷の数少ない同年輩の話し相手だったが、西郷が島津久光及び側近との対立を深める中、大山が久光グループの御機嫌取りをしていると受けとめ反感を強めた結果、発せられた言葉であった。こうしたことが、西郷が商人ひいては商業行為そのものを嫌った一例として拡大解釈されていくことになる。

それと、いま一つ、西郷が藩（県）の内外を問わず、経済官僚と目された人物の多くと反りが合わなかったことも、経済が苦手だと見なされるうえで、大きな関わりをもったと思われる。経済官僚とは、鹿児島の外にあっては大隈重信や井上馨ら、内にあっては市来四郎や五代友厚らであった。例えば、廃藩置県後、黒糖（砂糖）を扱う商社をつくり、その商社に生産から販売に至るすべての権限を与え、そこから得られる利益でもって、廃藩置県後とくに困窮の度を強めつつあった鹿児島士族の救済を図ろうとした市来四郎を、西

郷は「市来四郎などの山師」云々と激しく批判した（明治四年十二月十一日付桂久武宛書簡中に見られる言葉）。山師とは詐欺師さぎと同義であったが、こうした人物評価が、西郷が経済の解らない武骨一辺倒の男であったとの印象を後世に残すことになったのは争えない。

### ㊦ 経済に無関心だったわけではなかった西郷

つづいて、本節では、西郷が通常よく言われる経済に無関心だったわけではなかったことに筆を及ぼすことにしたい。この点との関連で、まず第一に目を止めねばならないのは、西郷が数えの十八歳こおりがたかきやくすけで郡方書役助に任じられ、農政を担当するようになったことである。これは、藩内のあちらこちらを巡回して、道路や堤防・橋などの土方工事を行なう必要があると判断すれば、その手当てあて（処置）をなし、その一方で年貢徴収の監督にあたるなど実務そのものを担当する職務であった。

こうした職務を、西郷は若き日に十年間にわたって担当した。そのため、彼は、年貢の算定などの作業で不可欠な計算力も身につけた。事実、息子の午次郎うまじろうの証言によると、「（父は）珠算（計算）も上手で十四五歳頃には評判になった位だ」という（西郷従宏『元帥西郷従道伝』）。これが西郷の実態だったのである。そして、この間、西郷は疲弊した農村と困窮している農民の実態（ひいては農民に対して過酷な藩政の実状）を肌身で知るにつれ、

打開策を講じることになる。それが後年、安政三年（一八五六）八月頃の時点で島津斉彬に直接提出したとされる西郷の農政に関する上書（意見書）となった。つまり彼は、大隈や伊藤などが馬鹿にしたほど、経済に暗い空理空論の徒ではありえなかったのである。

ついで目を止めねばならないのは、二度の流島生活をへて復活した後の西郷が、経済活動に自ら従事したいとの並々ならぬ希望を抱いたことである。西郷が復活を遂げたのは、禁門の変前の元治元年（一八六四）二月のことであった。沖永良部島から鹿児島に呼び戻された西郷はすぐに上洛し要職に就くが、その西郷は、同年九月八日付で大久保に宛てた書簡において、軍艦の購入が急がれていること、その軍艦の購入に当たっては薩摩藩の支配下にある琉球の産物を充てるのが望ましいといった考えを表明した。

そして、ついで、九月十六日付の大久保宛ての書簡において、時間に余裕ができれば、「私<sup>つひ</sup>面を突き出し、商法をやりたきものと相考え申し候」と記した。これは他人任せでなく、自ら商取り引きに当たりたいとの希望を藩主側近の大久保に対して表明したものであった。そして、この希望表明の後に、西郷の有名な言葉が大久保に向かって吐き出されることになる。「のるかそるかの仕事をいたしたく相含み居り申し候」というのが、それであった。

こうした文面が綴られる前に、西郷の具体的な対外貿易プランが記されている（後述す

る）のと併せ考えると、ここには経済活動を苦手とする西郷の姿は見られない。いや、むしろ、実態は真逆であったとすら評してもよからう。

## ■二．島津斉彬の近代化事業と西郷

### ⊖ 斉彬の近代化事業の特色

ここで西郷がこのような希望を表明するに至ったそもそものきっかけと、彼の希望がかなえられなかった要因等について説明を加えることにしたい。西郷が商業活動（とくに対外貿易事業）に大きな関心を払うようになった背景としては、やはりなんといっても、薩摩藩が幕末期にあって、最初に外圧（外国からの開国を求める圧力）に直面したことが挙げられる。

鹿児島は、いまでこそ日本国における辺境の一つだが、当時においては世界史に一番最初に触れる地域であった。すなわち、アメリカ合衆国をはじめとする欧米諸国の船は、アフリカ最南端を通り、インド・東南アジア地域を経由して琉球（沖縄）、ついで鹿児島にやって来た。また、薩摩藩は琉球を介して清（中国）と交易し、莫大な利益を獲得した。

このような薩摩藩の置かれた特殊な環境（条件）が、幕末期、全国にまたがる諸藩の中において、ひととき強烈な対外危機意識を薩摩人に呼び起こし、ついで危機的な状況を開關するための一番規模での富国強兵策に取

り組ませることになる。そして、その先鞭<sup>せんべん</sup>をつけたのが第十一代藩主の島津斉彬であった。彼は、進取の気性に富み、オランダ商館長やシーボルトらと親交をむすんで開明化政策を推進した曾祖父の島津重豪<sup>しげひで</sup>に可愛がられたこともあって、富国強兵政策・殖産興業政策を積極的に採用した。

当時の斉彬の発言を編纂して成った『島津斉彬言行録』を読むと、斉彬はどうやら琉球のみならず、奄美大島や鹿児島本土の山川港でも外国との貿易を行なうことを考えたようである。さらにそのうえ、彼は、この他、琉球を介してフランスから蒸気船を購入し、清国（および日本中の大名）に大小砲などの武器を売り込む計画すら立てたらしい。だが、これは斉彬の急死によって実現を見なかった。

### ㊦ 西郷に及ぼした影響

さて、ついで問題となるのが、斉彬のこのような気宇広大な一藩規模での富国強兵構想の西郷に及ぼした影響である。西郷が斉彬の構想に大きな影響を受けたことは間違いない。このことがよく解るのが、先ほど一寸ふれた第二次流島時代をへて復帰をはたした後であった。すなわち、元治元年に罪を許されて京都に上って来た西郷は、前掲の九月十六日付で大久保に宛てた書簡において、「明賢の諸侯四・五人」つまり賢明だと噂された諸侯（大名）数人と協力して、横浜と長崎両港を開くことをめざし、それが駄目だったら、

「断然と割拠の色を顕わし、国を富ますの策に出ず候<sup>いで</sup>わではあい済み申すまじき儀と存じ奉り候」と記した。

要は、全国規模での開港（有力藩も対外貿易に参加する）が幕府首脳の反対で不可能だとの判断がつけば、薩摩一藩での富国強兵策を実施すべきだとの考えを伝えたのである。そして、富国強兵策を実施するうえで不可欠な資金の獲得法として、次のようなプランも併せ伝えた。「只今蒸気船をもって、砂糖ならびに唐薬種<sup>からやくしゅ</sup>・煙草・鯉節<sup>りょうせつ</sup>様の品々御遣わしあい成り候て、初度は高利を欲せず、銅または糸<sup>きいと</sup>（生糸）等の品を替え候ては何様御座有りや」。

ここから明らかになるのは、西郷が斉彬の策をふまえて、さらにその上をいくプランを提示したということである。すなわち斉彬は、琉球を介しての対外貿易構想の段階に止まったが、西郷は横浜と長崎という東西を代表する二港を開港させることで、より大々的な対外貿易を構想するに至ったと言ってよい。

もちろん、国中に攘夷主義の嵐が吹き荒れていた当時<sup>ひそ</sup>にあっては、これは限りなく実現性に乏しいプランであった。だが、西郷は、第二次流島時代、沖永良部島にあつて、こうしたプランを密かに練っていたのである。

とにかく、西郷は、元治元年時点で、このような貿（交）易構想を抱き、ここから得られる利益でもって一藩規模での富国強兵の達成を目論んだが、この時点では実現を見なかった。その最大の理由は何か。まず筆頭に挙



げられるのは、斉彬が西郷に経済方面ではなく、政治方面での活躍を期待したことである。

すなわち斉彬は、独立の精神（気性）が強いものの、とび抜けて人間的魅力に溢れていた西郷をして対外交渉役に起用した。いうまでもなく、藩外の関係者との交渉を有利に進めていくためには、人間的魅力は不可欠の要素だったからである。また、斉彬に伴って江戸に上ってきた西郷は、短時日の間に藤田東湖らを介して水戸藩関係者をはじめとする諸藩の有能な人物との人的ネットワークを築くことに成功していた。これに目をつけた斉彬が、この方面の仕事を西郷に担当させたのである。他方、斉彬は、自分の経済方面の構想を実現するうえで役立つ人物として、優秀な経済官僚でもあった市来四郎を起用した。すなわち斉彬は、市来を琉球に派遣し、対外貿易開始に備えるべく根回しの作業に当たらせた。

こうした適材適所主義にもとづく斉彬の人材活用法が、西郷をして経済方面への関わり方を止めたと見なすことができる。そして、斉彬の没後、薩摩藩が中央政局の主人公としての立場をより深めるようになると、西郷はますます経済方面への関与ができなくなる。西郷がよりいっそう藩を代表する顔となった以上、当然のことであった。そして、西郷が徳川家による全国支配を打倒する運動の先頭に立つようになると、経済問題との直接的な関わりはほぼ完全に絶たれることになる。

### ■三．西郷の経済観の大きな特徴

#### ⊖ 西郷はなぜ商人肌の人物（なかでも武士）を嫌ったのか

本章では、最後に残された課題を幾つか取り上げることにはしたい。その一は、西郷が商人肌の人物（なかでも武士）をひどく嫌ったのは何故かという問題への解答である。これに対しては、薩摩藩士の実態が世間一般の人々が抱くイメージと大きく異なっていたことが関係したものと思われる。

薩摩藩は他藩と違って藩士に支給する給地高（知行地）の絶対量が不足していたにもかかわらず、武士増加策を採ってきた藩であった。その結果、他藩に比べて著しく武士の数が多きことが特色となった。しかし、当然のことながら、そのため武士の持高は零細化し、持高のみで生活できなくなる。そこで、藩士の大半は、困窮のあまり、内職（非武士の仕事）に励まざるをえなくなる。また同藩においては町人出身の武士が江戸期の後半になると増加する。これは献金によって武士身分に取り立てられるケースが柱となった。さらに、町人と癒着し、彼らに便宜を与えることで、利益を得ようとする者も少なくなかった。その結果、鹿児島では、利欲に耽る武士の増加が目立つことになる。

ところが、こうした環境の中で生育した西郷は、周知のように、薩摩藩独自の青少年教育制度であった郷中教育ごうちゅうにおいて「二才頭にせいら

としてリーダー役を担わされた人物であった。つまり、若くして範を垂れる（自らが実践して模範を示す）存在であることを求められた。ついで、西郷の人生は、彼を慕う後輩（若者）に対して抜群の影響力をもちえたために、つねに自らの行動を律していかなねばならなくなる。

こうしたことが、西郷をして、若き日から理想の武士としての姿を周辺に示さねばならない運命に陥らせることになる。それは、いうまでもなく、武士道精神に溢れた武士らしい武士の姿であった。だが、このような姿勢を堅持した西郷の前に存在したのは、いま挙げたように利に敏い多くの武士であり、市来や五代などの有能な経済官僚が富国強兵の掛け声の下、藩の経済政策の実権を事実上掌握している現状であった。そして、こういったことが、西郷の市来らに対する反発・反感に繋がったと想像される。また、そうしたことが、西郷が武士としての自覚を喪失していた（武士としての自覚・矜持<sup>きょうじ</sup>を失っていた）と見下した商人肌の薩摩藩士への毛嫌いともさらに繋がったと想像される。

そして、ここで留意しておかねばならないのは、西郷が商人肌の武士を嫌ったということ、資本主義そのものを激しく嫌ったということは同じではないことである。西郷が激しく嫌ったのは、町人と癒着し、彼らから賄賂をもらって便宜を図る、武士としての自覚と誇りを甚だしく欠いた武士だったのである。

## ㊦ 西郷の経済観の特徴

ついで、西郷の経済活動に対する基本的な態度として重要だと思われることを指摘しておきたい。それは二点に及ぶ。第一点は、先ほどの大久保宛ての書簡中にも記されていたように、西郷が対外貿易と対内交易の双方において、理不尽な巨利を求めようとはしなかったことである。少なくとも、巨大な利潤を当初からめざすようなことはなかった。当初は小さな利益で満足すべきだとした。そして、このような姿勢は対外交易のみならず、対内交易においても同様であった。すなわち西郷は、南の島に在った時以来、奄美大島をはじめとする島人からの非情なまでの藩当局及び藩役人による搾取を強く非難し続けた。

西郷は、奄美住民らにも十分な利益が及ぶことを望み、藩による一方的な収奪を嫌ったのである。むろん、こうした西郷の在り方は理想主義にすぎないといった式の批判も可能であろう。だが彼は、特定の立場にある者が不当に利益を独占することを、本来あるべき経済活動だとは考えなかった。そこには、三方好（良）しの精神に通じるものが見てとれる。

第二点は、明治期に入ってから西郷が、経済活動に国が介入すべきではなく、民間に任すべきだとしたことである。これは、島津久光と西郷隆盛の両者を政府に取りこむべく、明治三年（一八七〇）の十二月二十八日に鹿児島に勅使としてやって来た岩倉具視に提出した西郷の長文の意見書中に、政府が掌

---

握すべき権限は、「政度・紀律・賞罰・与奪等の権」に限り、その他の米価や金銀の相場あるいは商売等に関しては口を挟むべきではないとあることで判明する。

すなわち西郷は、なにもかも政府が先導して国民を引っ張るのではなく、経済面などは民間人の裁量に任せた方が良かった。ここには、基本的には自由経済を認める西郷の姿が集約して表われている。また、彼が本質面で専制的な政治家でなかったことも語られていた。

そして、西郷のこのような姿勢は、明治期の彼に特有の在り方によったと言える。それは、中央政府入りして以降の西郷は、先頭に立って自分の思う方向に状況を引っ張っていくといったことはせず、もっぱら担がれる形で政局に関わろうとしたということである。つまり、換言すれば、然るべき人材に個別問題の対処を全面的に任し、自分は高みからゆるやかに統率する（ただし、責任は取る）という独自の手法を採択したということであった。そして、こうした西郷の指導方針の下、維新政府による近代化政策（その中には資本主義の育成も含む）が担当者によって推進されていくことになる。

ただ、こうした明治期の西郷の在り方が、本稿の冒頭部で触れた大隈や伊藤の西郷評価に繋がったことは否めない。すなわち、大隈らは西郷を経済が不得手な無能そのものの人物だと断じたが、それにはこうした西郷の明治期の在り方が密接に関わったのである。

#### 〔参考文献〕

- ・拙著『西郷隆盛と幕末維新の政局』（ミネルヴァ書房、二〇一一年）
- ・拙著『西郷隆盛（日本評伝選）』（ミネルヴァ書房、二〇一七年）
- ・拙著『西郷隆盛 維新一五〇年目の真実』（NHK出版新書、二〇一七年）

